

藝術に於ける「兒童的なもの」

——特に兒童の繪畫について——

外山 卯三郎

一

「藝術の始源と言ふものは、有史以前の時代の發見物からたやすく考察される。それは更に現在でもなほ、兒童と自然人とに接して決定される事實によつて、光明を保つてゐる。先づ第一に、この事實を考察しましたこの事實から、藝術の起源に關する推論を導き出すべきである」と、かつてマックス・デツンアも言つたやうに、藝術の始源の問題を考へる時には、常に原始人と自然民族と兒童と云ふ三つの創造者を考へることが出来る。しか

も從來これ等の三つのものが、類似的な同じ權利のものとして取扱はれる傾向をもつてゐた。然し現在では、もはやさうした單純な思想に支配されてゐるものとは考へられない。⁽¹⁾原始人に對する自然民族の藝術、自然民族に對する兒童の藝術、その間にはかなり面白い類似點もないではないが、それはまた決して同一視すべきものではない。私達はいまこの第三の兒童の藝術に就いて、一つの藝術の始源を探索するとともに、藝術に於ける「兒童的なもの」を考へて見ることにしたい。

「兒童の藝術」と言はれるものも、色々な立場

からそれを對象として捕へることが出来る。いま

「藝術の始源」と言ふ問題から考へることとして
も、それが Ursprung der Kunst の意味に考へら
れる場合と、Anfänge der Kunst の意味に考へら
れる場合とによつて、同じ兒童の藝術でも異つた
面が對象とされてゐる。従つてさうした對象を取
扱ふ研究方法もまた、その對象を規定する立場に
よつて規定されて來る。いま「兒童の藝術」を藝
術の起源 Ursprung と言ふ立場から見れば、

それは發生的な研究となつて、兒童心性と言はれ
るやうなものに根據が求められる。つまり心理學
的な方法や哲學的な方法は、かうした立場の研究
であると云はねばならない。それに對して、い
ま「兒童の藝術」を藝術の始源 Anfänge と言ふ
立場から見れば、それは發生した結果、つま
り藝術そのものの具體的な研究の對象を形づく
ることになり、藝術學的な研究や歴史的なまた社會

學的な研究が可能となつて來る。

然しかうした二つの立場をとる藝術の始源も、
また決して全然異なつたものとは考へられない。
兒童の藝術と言はれるものは、言ふまでもなく兒
童心性の表現であるから、當然心理學的な研究對
象となつて來る。その兒童心性の表現と言はれる
ものにも、また一つの特殊な心的活動が考へられ
るものであり、そこに藝術的な形象描寫をする發
生的な活動が考へられる。然しさうした兒童の藝
術と言ふものが、一つの藝術形式をとりまた表現
の結果として考へられる時、それが兒童心性の表
現でも、やはり藝術と言ふ藝術學的な立場から考
察されねばならない。たとへそれが私達成人のや
うな藝術形成と同一でないにしても、その素朴な
原始状態にある形象描寫は、一つの藝術として考
察されねばならない。

言はば兒童の藝術といはれるものが、一つの兒

童の藝術である限り、その兒童の藝術を研究する最も根本的な立場は、やはり藝術學的な見かたをすることであると言へる。勿論それは兒童の藝術といふ、ある限定された分野に於いて考へられるものであるから、縦に藝術學的な考察をするにしても、必ず横に兒童心性といふことを忘れることが出来ない。言はば兒童の藝術といふものは、兒童心性といふ横糸と兒童の形象表現といふ縦糸とによつて、織り出されてゐる一つの錦であるといふことが出来る。従つて藝術の發生的研究と云ふ心理學的な側面からだけ見ることは、兒童心性そのものの理解となつても、兒童の藝術の全貌を明かにするものとは言へないだらう。また藝術學的な表現の結果から見ただけでは、多くの場合やはり兒童心性を忘れがちである。従つて私達はこの藝術の始源としての兒童の藝術を見るにしても、やはり *Ursprung der Kunst zu Anfänge der Kunst*

とをそれぞれ相關聯して、藝術に於ける「兒童的なもの」を考へて行かねばなるまい。

二

從來、兒童と言ふものは「未發達の大人」、つまりまだ十分に生長してゐない小さい大人といふやうに考へられてゐる。それは成人と言ふものが、發達した完成した大人であると言ふ觀點から出發してゐるもので、従つて兒童は「未發達な大人」であり、また「不完全な成人」であると言ふやうに考へられてゐた。⁽²⁾かうした立場に於いて考へられる兒童の藝術もまた、大人の優れた藝術家が最も發達した最も完成したものであるから、未發達な藝術家である兒童によつて表現された「不完全なまた未發達な大人の藝術」と言ふことになり、そこに大人でない大人の藝術と言ふやうな、一つの變體的な現象が生れて來る。いま私達はか

うした一つの實例として、兒童の繪畫の一つの變體現象である「自由畫」と言ふものを、ここに指適することが出来る。

近年非常に盛大になつてゐる「自由畫」と言はれてゐるものを見れば、それは嚴密な意味に於ける「兒童の繪畫」と區別しなければならぬ。「自由畫」と言はれてゐるものは、從來使用されてゐる臨畫本、つまり手本を描寫する繪畫から、兒童が手本を用ひずに自然を模寫するといふ状態に置かれたもので、手本の模寫と言ふ束縛された自由さから、自由にされたと言ふことを意味してゐる。然しかうした場合に考へられてゐることは、この見ると言ふ視覺現象も、また見ると言ふ感受性の形式も、それ等の悉くが成人のそれであつて決して兒童心性と言ふやうなものが考慮されてゐない。ここに私達は自由畫が、大人の意志のもとに、大人の視覺形式によつて、兒童にかかせた繪畫

と言ふ一つの變體的なものを見ることが出来る。従つてかうした状態の兒童の藝術の中に、眞實の意味の「兒童的なもの」— das Kindliche — を發見することが出来ない。

最近の兒童研究者によつて、發見された最も注目すべき態度は、兒童と言ふものを決して「小さい成人」、つまり未發達な大人とか不完全な大人といふやうに見るのでなく、「成人」— Erwachsene — と對立した特殊な人間形態であるとするにある。從來のやうな兒童に對する考へかたは、兒童と成人とをただ量的な關係に於いてだけ見てゐたもので、小さい大人即ち大人としての要素がまだ生長しない未發達な不完全な成人と言ふ見かたであつた。これに對して最近の兒童研究者は、兒童と成人との關係をただ量的な關係に於いて見るのではなく、質的な對立關係に於いて考へるやうになつてゐる。つまり成人とは性質的に異つた關係に

於いて考へられる、一つの完成した人間形態で、それが大人と言ふものに生長する特質を持つてゐる。

いまかうした立場に於いて考へられる「兒童の繪畫」を例にとるならば、それは言ふまでもなく「兒童畫」*Kindertätigung* と言はれるもので、それは決して「自由畫」と混同されてはならない。もしも兒童といふものが成人と量的な關係に於いてだけ考へられるとすれば、そこから生れて來る繪畫もまた「大人でない大人の繪畫」であつて、決して眞實な意味に於ける「兒童畫」とは考へられない。兒童がどれ程大人の繪畫に接近するとしても、兒童が大人に生長して了はない限り、兒童の繪畫はやはり「大人ではない大人の繪畫」と言ふことに歸着するだらう。兒童にどれだけ兒童らしい繪畫を描かせようとしても、物を見る視覺形式、特に兒童そのものの兒童心性といふものを認めな

い限り、そこには寧ろ大人らしい兒童の繪畫が生れて來るか、さもなければ「兒童らしい大人の繪畫」が生れて來るより他に道があるまい。さうしてそこに描かれた繪畫は、やはり成人の繪畫の理論によつて、評價され判断されてゐると言へる。

然し眞實な意味に於ける兒童の藝術は、決して成人との量的な關係に於いてだけ見られるものではなく、質的な對立關係に於いて見られる一つの形態である。従つて繪畫に例をとるならば、決して「兒童らしい繪畫」*kindliche Zeichnung* ではなくして、どこまでも「兒童の繪畫」*Kindertätigung* であるといふことが出来る。成人の立場に於いて考へられる藝術の根本的な理論は、感受性の形式による非論理的なものであるが、兒童といふ立場に於いて考へられる藝術にもまた、やはりさうした立場独自の藝術上の理論が考へられねばなるまい。それは決して成人と量的な關係に於い

て考へられるものではなく、どこまでも質的な對立關係をなしてゐる藝術上の根本的な理論がなくてはなるまい。さうしたところに藝術に於ける「兒童的なもの」を見ることが出来るだらう。成人に於いては認識の世界に對する美の世界があり、概念の世界に對する表現の世界がある。然し兒童にはさうした特殊な世界が意識されてゐず、またさうした分化した認識を持つてゐない。

従つて兒童の藝術を論じる最も根本となるものは、いふまでもなく「兒童心性」であるといふことが出来る。この兒童でなければ持つことの出来ない「兒童心性」といふものを根據として、兒童の藝術の研究をして行かねばなるまい。兒童心性そのものに對する考へかたも、恐らく學者によつて異説のあることはまぬがれない。然しこの兒童心性といふものを他に於いて、兒童の心理や兒童の藝術を理解し、また研究することは許されない。

この點に於いて總ての兒童研究者は、恐らく悉く一致した見解を持つてゐると言へるだらう。

三

私達成人の藝術活動に於いては、論理的なものではなく非論理的な感受性と言ふものが考へられてゐる。つまり藝術家の藝術活動とか藝術的な表現といふものは、どこまでも「非論理的なもの」*Das Alogische* であるといふにある。ところが兒童の

思考作用にも、藝術表現にも、またさうした「非論理的なもの」が考へられる。然しそれはやはり成人のそれとは異つた「兒童心性」によるものと考へられる。かうした兒童心性と言ふことに對する考へかたも、色々な異説をもつてゐるが、その中で最も注目すべき見解と思はれるものは、ジャン・ピアジェのそれであると言ふことが出来る。ピアジェはかうした兒童心性の最も根本的な特色を指

して、「自己中心性」*egocentrisme* と言ふ言葉で呼んでゐる。⁽⁴⁾然しこの自己中心性と言はれるものは、決して成人に見るやうな非論理的なものではなく、一つの特異なものであると言ふことが出来る。つまりピアジェにはせるならば、兒童の思考作用はフロイト流の精神乖離症 *autisme* と、成人の完全に社會化された思考様式との中間に位置するものと考へられる。つまり中間的な心性といふものは、その構造に於いてオテイスムに近いものであるが、然しオテイスムのやうに單に有機的な満足だけを目的とするのではなく、特にある「智的な適用」*adaptation intellectuelle* をめやす點で、成人の思考様式に近いと言ふことが出来る。かうした社會性をもたない、非論理的な思考様式を指して、ピアジェは「自己中心的」といつてゐる。この思考様式は成人に於いて「論理的な思考」*pensée logique* であるならば、兒童の思考様式は「半ば

論理的・半ばオテイスム的な思考」*pensée demi-logique, demi-autisme* であるといはれてゐる。このことはまた兒童の「見ると言ふこと」に於いても、同じやうに考へることが出来る。成人に於ける思考が論理的であるやうに、一般の成人の「見ると言ふこと」の形式を見ても、それは論理的であり合理的であるといふことが出来る。ただ特に藝術家に於いてのみ、見ると言ふことは論理的な「考へ得る意味」*denkbare Bedeutung* を持たずに、ただ見ると言ふことそのことのためにだけ見る非論理的な「感じ得る意味」*fühlbare Bedeutung* を持つてゐると言ふことが出来る。

然し私達がここで兒童の思考作用が、非社會的であり非論理的であるといつたとしても、それは藝術家に於ける感受性そのものと、直ちに同一視することが出来ない。この二つの非論理的な見ると言ふことは、非常に類似性をもちまた親和性を

もつてはゐるが、決して同一視することが出来な
い。何故といふならば、児童の思考作用には必ず
「智的な適用」adaptation intellectualといふもの
が見出される。ところが藝術家に於ける感受性と
いふものは、純粹な感じ得る意味によるものとい
はねばならない。やはり児童の「見るといふこと」
の形式に於いても、さうした「智的な適用」があ
るので、さうした點でやはり成人の純粹な感受性
による見るといふことと同一視することが出来な
い。

近代の児童研究史上にエポックを劃したコラア
ド・リツチの言葉のやうに、児童は人間が二つの脚
を持つてゐることを知つてゐるからそれを二本描
きどどこについてゐるかの場所を考へてゐないから
偶然にくつつけ、時として眼に見えてゐない脚ま
でもつけ加へるものだと、このコラアド・リツチの
言葉は、現在一つの児童研究上の法則のやうに考

藝術に於ける児童的なもの

へられてゐるが、これは要するに児童の見ると言
ふことの形式の中に含まれてゐる「智的な適用」を
指してゐるに他ならない。つまり児童の思考作用
と言ふものが、ピアジェによつて非社會的であり、
自己中心的事であることが明かになつたやうに、ま
た児童の見ると言ふ視覚形式もまた、決して成人
と同一視するやうな量的關係に於いて考へること
は出来ない。児童の思考がさうであるやうに、兒
童の見るといふ視覚形式もまた明かに成人のそれ
と、質的な對立關係を持つてゐなければならな
い。それがその思考に於いてと同じやうに、その
視覚形式もまた明かに非社會的であり、自己中心
的事であると言ふことが出来る。その自己中心的な
非論理的な視覚形式には、成人の藝術家の感受性
にも見出せない「智的な適用」が見出されるのだら
う。かうした點で児童の繪畫が一種のレアリスム
であると云ふリユケエの言葉もまた可能と言へる。⁽⁶⁾

私達は兒童の見るといふ視覚形式を形づくつてゐる要素として、その非論理的なものと對立して、必ず理智的であるといふことを見出してゐる。然しそれが智的であるといつても、決して成人に於けるやうに、因果關係のある論理的なものではない。それはピアヂェによつて指摘されてゐるやうに、「因果以前」*précausale*と言はれるものに相當してゐる。兒童は何何だから何何だといふやうにいつてゐるが、それは決して理論的な因果關係を持つてゐるものではなく、偶然的な因果以前といはれる結合である。かうした見かたを指して、ピアヂェは「智的なレアリスム」*le réalisme intellectuel*といふことから論じてゐる。

またピアヂェは自己中心的な傾向から、兒童にとつて内觀するといふことの不可能であることを述べてゐる。従つて兒童は自分の心の中に起ることと、自分の外に起ることとの限界を明白に區別

することが出来ない。つまり兒童は自分の思想が、主觀的であるといふことを知らず、それを外界に投げ出さうとする。ここにピアヂェの言ふ「兒童的なレアリスム」と言ふものが考へられる。然し「兒童的なレアリスム」といふものは、兒童の頭の中で智的に作り上げたレアリスムであつて、あるがままを描出する視覚的なレアリスムではない。従つてピアヂェは、かうしたレアリスムを指して、「視覚的なレアリスム」*le réalisme visuel*に對する「智的なレアリスム」*le réalisme intellectuel*といつてゐる。リユケエもまたピアヂェと同じく、視覚的なレアリスムでない「智的なレアリスム」であると言つてゐる。

兒童といふものは必ず物があるがままに見ない。それは見ないからか見ることが出来ないからか疑問視されてゐる。私達はそれを見ると言ふことに於ける「兒童的なもの」が、その思考作用と同じやう

に、常に非社會的であり非論理的な自己中心性をもつてゐるから、成人に於けるやうな「現象に忠實な形象」*erscheinungstreue Bilde*といふものを見る事が出来ない。つまり兒童は必ず自分の想像で物をデフォルメしてゐるといふピアデエの言葉は、この視覺形式に於ける「兒童的なもの」を捕へた言葉といふことが出来る。つまり兒童が自分の想像で物をまげて見るところに、兒童の喜びや満足があるので、そこに兒童の遊戯の世界が開かれるといふことが考へられる。つまりピアデエはかうした點から、遊戯は動作と夢であることを考へ、視覺的なレアリスムであれば、物の空間的な關係やメカニク的な因果關係を見る。然し智的なレアリスムは客觀的な觀察とは、全く別のものであると考へられる。

兒童が非常に原始的な素朴な形象描寫をするのはどういふ理由によるだらうか？ある學者は技巧の

藝術に於ける「兒童的なもの」

未發達な點から論じようとしてゐるが、然しこれは決してその大勢を決定するものとは考へられな^い。ピュアラもさうした手の未熟さを考へ、また成人がさうした形象を兒童に示したからと言ふやうな理由を考へてゐるが、やはりそれは兒童が異つた物の見とりかたをするからだといつてゐる。⁽⁷⁾然しピュアラにあつては、それを兒童の網膜像が全く異つて作られてゐるからだと解釋してゐる。この考へかたはかなり生理心理的な傾向を示すもので、決して兒童畫の總ての形象を説明するに十分なものであるといふことは出来ないだらう。

勿論私達も兒童畫に見られる形象の原始性は、必ずしも知覺内容の原始性だけによつてゐると思はれない。私達は兒童の思考作用と平行して、見るといふ視覺形式に於ける「兒童的なもの」を考へるものである。それもまた必ずしも純然と思考作用と遊離してゐるものでなく、密接に結合し

てゐると考へられる。さうした自己中心的な思考様式と結合した感覺形式もまた、自己中心的であり非論理的である。それも成人に於けるやうな *erscheinungstreue Bilde* ではなくして *ideoplastische Bilde* に見ることである。それは成人の藝術的な感受性の純粹さによるものでもなく、それは近似してゐるが、やはり兒童の兒童心性の特殊な自己中心性によるものと考へられる。しかも兒童畫も、兒童に於ける造形的な表現である限り、やはり見るといふ視覺形式に、その根據がなくてはならない。さうした點からこそ眞に兒童の繪畫の「兒童的なもの」の理論が明かに出來ると言へる。

四

私達は藝術的な見ると言ふことに於ける「兒童的なもの」を、ここで考へて見たい。兒童は一般に錯畫時代の終頃になると、ぎこちない圓形を描

き、その圓の中に二つの小さい圓を描き、それを人の顔だと言ふ。またこの外の圓の左右に二本の直線を引いて、腕だと言ひその圓の下に二本の直線を描いて脚だと言ふ。これはつまりピュアラやケルシェンシュタイナの言つてゐる「圖式の時代」*die Stufe des Schemas* であつて、⁽³⁾無形象な「錯畫」*Kritzeln* と自由な描寫の出來る時代との間に現れる最も兒童的な特色を示す一時代と言へる。かうしたいはゆる圖式の時代に於いて、取扱はれる兒童の造形物は、實に粗雑なまた出來そこねた形象を持つてゐる。従つて一般に多くの心理學者は、かうして特殊な形象描寫を説明するために、非常な苦心をしまた異論を立ててゐる。

かつて最も多く信じられてゐた説に、兒童の手の運動が未發達なために、彼等兒童がかうした稚拙な形象描寫をするといふ考へかたがあつた。つまりこれはある興味のあるものを描寫しようとし

ても、兒童の手の運動調節が出来ないから、成人のやうな形象描寫が出来ないといふにある。事實、兒童の手の運動調節が成人のやうに十分發達してゐないといふことは、恐らく生理學的に考へて眞實であるだらう。然しそのことがはたして、兒童の形象描寫の特性を決定する第一條件であるとすることは、かなり疑はしいやうに思はれる。例へばこれについてエルンスト・モイマンもいつてゐるやうに、兒童が手の運動を器用にすることが出来るとしても、⁽⁹⁾はたして繪畫を上手に描くことは出来ないだらうと。手の運動調節の不能といふことは、描畫上の一つの條件であるにしても、それは決して決定的な條件であるとは考へられない。かうした生理的な考へかたでなく、もつと深い根柢からこの問題が省られなければならないまい。

かうした考へかたに、一つのエポックを作つてゐるのは、恐らくハインツ・ヅエルネルの考へか

たであると思はれる。彼に言はせるならば、兒童のかうした圖式的な繪は兒童の原始的な知覺構造が、そのまま表現されたものだからと言ふにある。⁽¹⁰⁾

兒童は混沌としたものを知覺するといふよりも、兒童の知覺そのものに理論性を持つてゐないといふことは、すでにピアヂェも指摘してゐることで、知覺構造そのものが論理的な形象を持つてゐないと考へることが、十分妥當であるやうに思はれる。この點で私達はハイムの言つてゐる、兒童が下手に描くことは對象を正しく見ることが出来ないから、と言ふ言葉に非常な興味を感じないでゐられない。つまり正しく見ることが出来ないといふことは、私達の考へかたからすれば、見ると言ふことに於ける「兒童的なもの」が、成人的な理論性を持つてゐないといふことに外ならない。従つて正しく見ることが出来ないといふことは、成人のやうな見る知覺構造を持つてゐないといふこと

になる。私達はこのハイム・ヴェルネル説のやうな考へかたを、私達の考へてゐる見ると言ふことに於ける「兒童的なもの」に結合させて、考へて行くことが最も妥當であるやうに思はれる。このやうに兒童藝術上の見ると言ふことに於ける「兒童的なもの」は、質的にも特殊なものであり、また特殊な心的構造を持つてゐると考へなければならぬ。従つて兒童畫に於ける畫因や主題もまた、たゞそれが興味の對象であるだけでなく、その對象が見ると言ふことに於いて「兒童的なもの」の特色を持ち、それがその兒童的な歪形を受け、兒童的に取扱はれ、運動調節をもたない手によつて描出されてゐると言ふことが出来る。ただ心理學的な立場からだけ考へられる場合には、やはり生理心理的な手の運動調節とか知覺といふやうな點からだけ、この問題を解決しようとするものである。

然しそれが一つの繪畫的な形象描寫であり、造形物である限りやはり「見ると云ふこと」を忘却することは許されない。つまりその見るといふことの構造、特に見ると言ふことに於ける「兒童的なもの」の構造を、十分明かにして、そこから考へて行くことが最も妥當であるといへる。この見るといふことの構造が、先づ第一に成人のやうに純粹に見ると言ふことそのこと、そのものの感受性形式として考へられない、つまり未分化の形態に置かれてゐると言ふことである。第二にはその概念的なまた知覺的な見ると言ふことが、非論理的な自己中心的な形態をとつてゐるといふことがそれである。かうした特殊な兒童的な見るといふ立場から、兒童の興味の對象が畫因として捕へられ、さうした見ると言ふことの視覺形式（兒童的に見るならばまだ一つの概念であるが）として取扱はれ、描寫されるものと考へることが出来る。

かうした兒童に於ける「見ると言ふこと」を最も注目してゐるのは、ダフィット・クッツの主張した「直視的な形態」orthoskopische Gestaltであるといふことが出来るだらう。カッツの考へによるならば、もしも兒童に四本の脚を持つてゐる四角な机を描かせたとする。その場合に机の面といふものは、成人の場合に透視法的な不等邊四邊形か、さもなければ菱形に描かれるだらう。ところが兒童の場合には、これを四角形に描くのが一般である。つまり私達はある對象に就いて、一定した基本的な形態を固持する傾向を認めることが出来る。それが即ち「直視的な形態」である。四角な机の面の直視的な形態といふものは四角形である。従つて兒童は机の一面を四角に描いてゐる。¹¹⁾

このカッツのいふ「直視的な形態」はいひかへるならば見ると言ふことに於ける「兒童的なもの」の形態であつて、それが成人のやうに視覺的な順

應さをもつ視覺形態ではない。菱形に見える形象を、やはり四角に見るといふ直視的な形態は、やはり概念的であり知覺的な論理性を持たないことを示してゐる。見ると言ふことに於ける「兒童的なもの」の一つの形態を、物語るに十分であるといふことが出来るだらう。つまり視覺形態に於ける「兒童的なもの」は、一つの概念であり知識であるにも拘らず、その構造が論理的でなく自己中心的であるために、非常識的な歪みを示すものである。ここにカッツのいふ「直視的な形態」の意味があり、私達のいふ見ると言ふことに於ける「兒童的なもの」の意味があるといふことが出来るだらう。

五

私達は見るといふことに於ける「兒童的なもの」の理論的な構造を考へてゐるのであるが、然しか

うした兒童特有の視覺形式を明かにするために、私達は實例を示しながら、見るといふことの兒童的な特色を考へて行かねばなるまい。

私達は見るといふことに於ける「兒童的なもの」の形式は、自己中心的でありまた非論理的であるといつた。かうした兒童的な視覺形式は、兒童畫に於いて直ちに認めることが出来るだらう。その最も著しいものは、リュケエも指摘してゐるやうに、「統一性の不能」*incapacité synthétique*であるといふことが出来る。つまり兒童は成人の藝術家のやうに、物を全體から部分にと全的な統一をもつて見るといふことが出来ない。従つて、それ等の相互間に統一といふものを失つて了ふ。その最も著しいのは「割合」*proportion*といふことの缺けてゐることである。兒童は遠近とか大小とかいふやうな論理的な思考を持たないやうに、兒童の視覺形式に於いてもまたさうした點が缺けてゐる。

また割合といふことが失はれてゐるから、兒童の最も興味を持つものを、割合を破つて大きく強調することが試みられる。またその當然の結果として、物と物との相互間の「關係の排除」*l'exclusion des relations*と言ふものが現はれて來る。

ある有機的な關係を持つてゐるものでも、兒童はそれに有機關係を認めることが出来ないから、それ等を常にばらばらに描いてゐる。例へば人物畫を見るが良い。人物は顔と腕と脚が描かれる。然し腕は顔から出てゐるし、脚もまた顔から發足するといふ状態である。それが生長するにつれて胴が現れ、胴から手が出るやうになるが、その手には無数の指があつたりする。また自轉車のやうなメカニクなもの、著しい關係の排除を示してゐる。これはただ有機關係ではなく、量的な關係に於いても同じである。

いまリュケエ蒐集の兒童畫の中から、一つの實

例をとつて見ることにしよう。ここに八才八ヶ月の児童シモヌの描いた「汽車」をとつて見よう。軌道と車體との有機的な關係は、全く遊離して児童の「關係の缺除」を示してゐる。運轉手と車體と人の部分的な割合などは、随分歪められてゐる。

かうした「統一性の不能」と言ふことは、児童の生長の年齢に應じて減少はするが、完全に視覚化するところが、仲々困難であると思はれる。私達は児童の視覚形式が、非論理的でありまた自己中心の的であると云へるが、そこには智的な適用があり、また智的なレアリスムといふ特色を持つてゐるといふことが出来る。私達はさうした點でもまた「統一性の不能」と言ふことを、先づ擧げることが妥當と思はれる。

「統一性の不能」と言つても、色々な特殊な場合が考へられるもので、さうした顯著ないくつかの特色を擧げることが出来る。いまその一つとして

「透明性」Transparence. と云ふ面白い児童的なものを見る事が出来る。それは視覚的なレアリスムからすれば、決して見る事の出来ないものであるにも拘らず、児童の繪畫に於いて明白に描かれてゐる。それはビュアラもいつてゐるやうに、児童は自分が人間について知つて居り、丁度自分に思ひ浮べたことを、児童が繪畫の中に描出するからである。人物は側面を向いてゐる場合であるにも拘らず、二つの眼を持つてゐなければならぬ。また馬に乗つた人は、その二本の足が見えなくとも、描かなくてはならない。着物はあたかも人形に着せるやうに、人間を描いたあとからつけ加へる。だから着物を透して人間が見えてゐる。またポケットの中にあるものは、悉く外部から見えず、財布の中に入つてゐる銅貨は、あたかもレントゲン像のやうに見えないものでも透して見える。従つてこれを指して「レントゲン繪」Röntgen-

senbild」といつてゐる。⁽⁷⁾かうして視覺的に見えな
 いものでも、兒童の視覺形式には現れるものであ
 つて、つまり「智的なレアリズム」と言はれてゐ
 る理由がそこにあると考へられる。しかもそれが
 どこまでも「視覺的なもの」ではなく、「智的なも
 の」であるといふこともまた明かになる。リュケ
 エはかうした物を透かして見るといふ兒童的な見
 かたを指して、「透明性」といつてゐる。⁽⁶⁾

見ると言ふことに於ける「兒童的なもの」の特
 色は、ただこれだけではない。この智的なレアリ
 スムといはれる要素と、自己中心的な非論理性と
 が結合して、もつと兒童独自の視覺形式が生れて
 来る。それは立體的なものを取扱ふ時に、著しく
 現れて来る。さうした現象を指して、リュケエは
 立體的なものを「平面に表現すること」*in reiner
 sciation an plan*といつてゐる。いま一つの實例
 をとつて見れば、リュケエ蒐集中に見られる、七

才七ヶ月のシモヌの描いた「馬車」の繪を擧げるこ
 とが出来る。馬は側面から見てゐるが、車體は上
 から見て全部平面的な圖形に描いてゐる。側面か
 らしか見ることの出来ない兩車輪が、上下に平面
 化されてゐる。この上から見た平面的な車體の上
 に、正面から見た馬車屋と三人の人物を描き、背
 後からでなければ見えない幌の窓が描かれてゐ
 る。この人物は明かに幌の中に乗つてゐるのが、
 レントゲン繪として見えてゐるので、このやうに
 兒童の繪は車輪が平面化されたり、レントゲンの
 やうに透明にされたり、色々な觀點から見た部分
 が混同されたりしてゐる。かうした繪をもつて、た
 だ兒童の描畫技巧の缺乏とだけ考へてゐるやうな
 人もゐるが、それは決して正當とは思はれない。
 相當優秀な技巧を持つてゐるにも拘らず、やはり
 かうした複雑な平面化をやつてゐるのは、やはり
 見ると言ふことに兒童的な視覺形式があるからと

言はねばなるまい。リュケエはかうした物を平面化して見る兒童的な見かたを「平面化」 *ralatto-ment* となづけてゐる。(6)

兒童に於ける特殊な視覺形式は、かうした立體的なものをただ平面化するだけではなく、この立體を色々な視點から見、それを同一平面に重積すると云ふ仕方をとつてゐる。それはただ自己中心的な傾向だけから來るものではなくして、智的なレアリスムの傾向から來るものと言へる。ある庭のある家を描いたとしても、家を正面から平面的に見てそれを描き、次にテラスや庭を上から鳥瞰してそれを描き、それに人物をまた他の視點から見てそれを描くと云ふやうに、一つの畫面の中に色々な視點から見つたものが統一もなく重積され配列されて、混同して描かれてゐるのはそれである。先に例示したレモスの描いた馬車の繪でもそのこととは見られたがいま一つ別の例を擧げて見よう。

それはケルシユンシユタイナア蒐集の中に、九歳になるババリアの兒童の描いた「雪投げ」の繪が見出される。この興味深い繪は先づ鍵形に描かれた道の兩側に、平面化された並木が百足でも歩いてゐるやうに描かれ、煙突から煙を出してゐる二軒の家が立つてゐる。その道を行くと公園らしい廣場があつて、そこで子供が雪投げをして遊んでゐる。これも前の馬車の繪のやうに、立體的なものを平面化してゐると同時に、色々な視點から見つたものが一つの畫面に混同されてゐると云へる。リュケエはかうした兒童的な見かたを指して、「視點の變化」 *changement de point de vue* といつてゐる。これ等は見ると言ふことに於ける「兒童的なもの」の形式として、最も顯著な特色であると言ふことが出来るだらう。このやうに兒童的な視覺は、成人の純粹な感受性によるものとは異つて、著しく智的であると言ふことが出来る。

六

従つて私達は上述のやうな觀點からして、藝術に於ける「兒童的なもの」の特色は、直ちに兒童の知覺内容そのものの原始性や素朴性に求められるやうな心理學的な考へかたに、賛同することが出来ない。またそれと同時に、兒童が繪畫的な形式にものを表現する場合に、その描寫形式が原始的な素朴さを持たなければならぬと言ふ根據を心理學的な條件に求めようとしてゐるのにも賛同することが出来ない。ある心理學者はかうした心理學的な條件を追求して、その原始的な素朴さといふものが、ただ單なる技巧的な缺陷に歸因するものでないことを明かにし、特に「繪を描く心構へ」*zeichnerische Einstellung*と言ふことを考へてゐる。⁽¹²⁾この點は心理學的な考察として、注目すべきものと思はれるが、やはりそれもまた知覺作用

の領域を脱して、繪そのものの兒童的な素朴さを十分に、繪畫的に明示することが出来ないだらう。

私達はかうした *zeichnerische Einstellung* を認めることには、決してやぶさかではないが、その繪を描く心構へそのものの兒童的な特色を考へねばならない。そうした點で、私達はやはりマックス・フェルヴォールのいつてゐるやうに、兒童と言ふものは *das Physio-plastische* に物を見たり描寫するのではなく、どこでも *das Ideo-plastische* に物を見たり描寫をするといふやうに考へねばなるまい。⁽¹³⁾かうした考へかたは、ただ單に *zeichnerische Einstellung* を考へてゐるよりも、はるかに兒童的な妥當性をもつてゐるもので、はるかに深く兒童畫の領域に侵入してゐるといふことが出来るだらう。然しかうした考へかたから、ただ *physio-plastische Kunst* と *ideo-plastische Kunst* とをふやうに造形美術として區別して見るだけでは十

分でない。その成生の起源を藝術學的に明かにしなければ、眞實の兒童の繪畫に於ける「兒童的なもの」を、十分に明かにすることが出来ないだろう。

従つて私達がかうした點を明かにするために、やはりハインリヒ・ヴェルフリンが考へたやうな「藝術的な見ると言ふこと」⁽¹⁴⁾ künstlerisches Sehen と言ふやうなことを考へなければならぬ。さうして兒童に於ける das Ideoplastische な考へかたをそれに加へて、つまり「兒童的な藝術的な見ると言ふこと」⁽¹⁵⁾ kindlich-künstlerisches Sehen と言ふことを考へなければならぬ。それを私達は特にマックス・フェルヴァルンの考へかたを加へて ideoplastisches Sehen といふやうに考へることが出来ると思ふ。私達が以上數節に於いて考へた考へかたは、即ちかうした立場から考へた見かたである。これを「見ると言ふこと」に於ける兒童的なもの

の一といふやうにいつて來たが、それはやはりかうした kindlich-künstlerisches Sehen を指すものであつて、この點からのみ藝術に於ける「兒童的なもの」並に兒童の繪畫を眞實に繪畫として、また藝術として十分理解もし、評價し研究することが出来ると思はれる。

- (1) Max Dessoir, Aesthetik und allgemeine Kunstwissenschaft, 1923.
- (2) Jean Piaget, Les traits principaux de la logique de l'enfant, Z. de ps. 1924. 正木正氏の論文(兒童心理學の課題及び出發)心理學研究・第二卷・第三輯参照
- (3) Karl Bühler, Die geistige Entwicklung Kindes, 2 Aufl. 1921.
- (4) Jean Piaget, La langage et la pensée chez l'enfant, 1923.
- (5) Corrado Ricci, L'arte dei bambini. 1887.
- (6) G. H. Tarquet, Le Dessin enfantin. 1927.
- (7) Karl Bühler, Abriss der geistigen Entwicklung der Kindes, 1929.
- (8) Georg Kerschensteiner, Die Entwicklung der zeichnerischen Begabung, 1905.

- (9) Ernst Meumann, Abriß der experimentelles Pädagogik.
- (10) Heinz Werner, Einführung der experimentelle Kinderpsychologie, 1926.
- (11) David Katz, Ein Beitrag zur Kenntnis der Kinderzeichnungen, 1906.
- (12) 梅津久三氏稿、児童作用の概念的省察の心理学研究第六卷 第四輯。
- (13) Max Verworn, Zur Psychologie der primitiven Kunst, 1908.
- (14) Heinrich Wölfflin, Kunstgeschichtliche Grundbegriffe, 1923.